平成２８年１月１日　　日本ボーイスカウト北海道連盟

日本ボーイスカウト北海道連盟だより　１５２号

斧の響き

第 57 回　全道スカウティング研究協議会　記念講演

スカウツ　スピリットを繋ぐ

～創始者　ベーデン・パウエルを想う～

〔講師〕　杉原　正

公益財団法人ボーイスカウト日本連盟　顧問・先達

〔むずかしいことをやさしく〕

～いかにスカウトを教育するのか～

今日お邪魔した全道研〔全道スカウティング研究協議会〕では、継続的にプログラム活動について研修を続けられ子供達にどう伝えるか学習されているとお聞きしました。

私も長くスカウト活動をやっており自分なりの知識は持っておりますが、実は知識というのは持っているだけでは意味がない、それをどのように伝えることが出来るか、正しく伝えることが出来るかということが指導者にとって大事な資質だと思います。

技能を持っている人、縛材でも、モールスでも技術は非常に上手に出来るが、伝えることがうまく出来ない方がいます。折角優秀な技術を持っていながら子供たちに繋げていないということが多くないでしょうか。

私たちは今人生８０年という状況の中で、学習すること、勉強するということは、ただ単に少年時代、青年時代に学校を中心とした典型的な訓練（教育）を受けるということだけではなくて、日々の生活の中でも、また昨日皆さんがそれぞれ行った学びも、大人としての学習をすることが必要なのです。

その学習がそれで留まるのではなくて、ぜひ後に続く子供たちのところに届くことが大事です。そうでないと我々が何を学んだのか、あるいは何を知っているのか、ということがスカウトに繋がらないと思います。

同様にスカウト精神をどのようにスカウトたちに繋げていくのか、今日的な大きな課題ではないでしょうか。

我が国には沢山の青少年団体があり、これまで文部科学省が所管している青少年に直接的な教育活動をしている団体が約３０団体あります。

子供たちや青年たちの育成をしている団体では、青年たちを対象にしている、YMCA、YWCA、日本青年団など。少年たちを対象にしている、ボーイスカウト、ガールスカウト、子供会、宇宙少年団、海洋少年団、緑の少年団、交通少年団、消防少年団などがあります。

このように色々な団体があり、それぞれの団体も自分たちの活動を通じて、子供たちがより良い社会人になってほしい、いい人生を送ってほしいと活動しています。

しかし、団体に参加する時に「ちかい」と「おきて」を唱える団体は私の承知している限りではボーイスカウトとガールスカウト以外にはないでしょう。団体の活動に参加する時に一人称で“私は”

と言って「やくそく」〔ボーイスカウトでは「ちかい」、ガールスカウトでは「やくそく」〕をして、そして日々の生活で表す「おきて」をかなり具体的に詳しく表示している団体はありません。
　このように、他の団体にない特色を持っている我々は、そのことを本当に活かしているのだろうか。
　私は活かしていないと思います。活かしていたら、こんなに人数が減ることはなかったと思います。
　この「ちかい」と「おきて」が、大人の知識の中にだけ留まっていて、ボーイスカウトはなんぞや、ボーイスカウトは何者かということを自分では分かっていても、実際に子供の琴線には伝わっていなかったのではないでしょうか。

＜いかに伝えるか、教えるか＞

　伝える工夫をしなかった。難しいことを難しいことにしてしまった。我々の役目は、難しいことを易しく伝えるということ、知らせるということをしないと、次の世代には繋っていかないのです。
　このことは私自身の反省でもあります。長く指導者養成に関わっておりお伝えしたと自分で思っていましたが、１０年経ち、２０年経ち、３０年経ってみると、私の教えたリーダーの次のリーダーのところには今、私の考えていることは伝わっておりませんでした。

　「ちかい」は「ちかい」、「おきて」は「おきて」で、最も大事な“Be Prepared、備えよ常に”が行われていない。まして一番究極的な意味での“日日の善行”が全然行われていないと思います。
　言葉だけの「ちかい」「おきて」になっていないでしょうか。
　我々のモットーとしている、“常にやれるように備えよ”「備えよ常に」と「日日の善行」に結び付いていない。
　我々が子供の時には“一日一善”と言っていましたが、一日一回善い事をやったらお終いという意味ではなくて、何回も善行をする。今、こういう結びを≪ネッカチーフの先を本結び≫していない人が多いですね。

　我々は子供達が善行するためには、「朝起きたら≪ネッカチーフの先≫を結ぼうね」、「何かいいことをしたら解こうね」「だけども、一回やったらもういいんじゃなくて、また出来たらやろうね、また結ぼうね」と・・・。
　だから極端に言えばいつも≪ネッカチーフの先≫は結ばれているわけです。
　このような具体的な事がなく子供たちに“日日の善行”をいくら説いても無駄です。釈迦に説法という表現は大変申し訳ないがこのような事が具体的に行われていないから、実際のところ現場で本当のスカウティングが行われていないのです。
　言い換えれば、テントを上手に張れるとか、パレードが上手であるとかだけをスカウト活動の醍醐味だと思ってしまっていて、本当に一人一人の子供が自分が生かされていることに対しての感謝というものが何かの行動に表れるようなパターンになっていなければ、子供たちは「ちかい」は“ちかい”と言っているだけ、“日日の善行”はリーダーから言われたら行う、形だけになっており、スカウツスピリットが繋がれていない、繋いでいないというふうに思わざるを得ません。

〔節目に向き合う〕

～終戦７０年と世界ジャンボリー～

＜戦後７０年と戦前７０年＞

　昭和２０年（１９４５年）８月１５日、太平洋戦争が終わりました。
　私自身は戦前の生まれで、少年時代、太平洋戦争の１９４１年から４５年までの約５年間は戦時中の生活をしていました。
　「鬼畜米英」「欲しがりません勝つまでは」と、出征していく人たちへの千人針（女性の方が出征しに行く人たちが“虎は千里行って千里帰る”という諺にちなみ、無事に帰ってくることを願い、千の糸結びを作る）などを間近に見ていました。
　学校は、小学校から「国民学校」に替わり、今まで子供とか、少年とかと呼んでいるのを、「少国民」と呼ばれました。

私はそういう時代が来てほしくないのです。子供は子供であってほしい。言い換えれば、「少国民」として国のために役立つというような人間をつくっていくのだというようなことになったら困るのです。

１９４１年、政党や団体などを全部が一つにまとまり国のためということで「翼賛会」が作られ、国全体が全部一つになってしまった。

青少年団体も一つになるということで「大日本青少年団」という活動に変わりましたが、ボーイスカウトは参加しなかったのです。スカウト運動が戦争というのに利用されてしまったらいけないということを強く感じた先輩たちは、「大日本青少年団」に参加をしないで「健志会」という組織だけ残して、戦前の約５年間ボーイスカウト運動は行われていなかったのです。

終戦により連合国軍が日本を占領したが、かつてボーイスカウト〔少年団〕をやっていた人たちや進駐軍の GHQ でボーイスカウトをやっていた方など理解があった方々が合い寄って、なんとか日本の復興のためには青少年を育成することを考えられた。

その時に、日本のボーイスカウト再興にいくつかの条件を GHQ の民間情報教育局〔CIE〕が出している。（このＣＩＥは教育に関してはそこが全部やっていました。）

アメリカが出した条件は、「旧大日本青少年団をやっていた人は初めの骨格を作る時に入れない。」「育成団体がしっかりした所につくる。」「指導者には所定の訓練を受けてもらう。」「子供達はできるだけ地域から選ぶ。」などのいくつかの条件を出して認めたのです。

しばらくは国旗は揚げてもいけない、敬礼もしてはいけない、という時代でした。

その時に、日本連盟の再建のボーイスカウトマークは、アメリカはこれ〔スカウトマーク中央の鏡〕を変えなさい、日本は平和の国だから鳩にしなさいと言ってきた。

アメリカはご存知のようにイーグルで、韓国はトラで国のシンボルです。

日本の関係者はこれは「三種の神器」なので、三つの天皇家の神器。刀（剣）と、宝石（玉）と鏡、で、「心を映すもの」あるいは「正直さを表す」ということを主張して“鏡”が残り、今に続いています。

戦争で負けて新しい国づくりをするためのボーイスカウトでもなかなか活動ができず戦後１９４６年１２月、終戦から１年後に GHQ からボーイスカウトを作る認可がでました。

その時に、東京に５つの隊と横浜に１つの隊を実験隊として始まりました。

東京第１隊は成城学園で学校を母体にした隊。第２隊、通入寺という浅草にあるお寺さんを隊にした。第３隊は赤坂の円通寺というお寺さんで、特に子供の読書関係の勉強をすることを続けていた所に作る。４つ目は私の住居の近くにあったプロテスタントのキリスト教の霊南坂教会が母体。５つ目の隊が地域団で、現在九段にあります靖国神社を拠点とした隊の５つを試験的に作ったのです。

この時、ボーイスカウトを始めるにあたっては、「きちんと育成する母体を作らないと健全な教育が出来ない」というのがアメリカの強烈な指導だった。

今この５コ隊のうち、残念ながら１つだけ廃団になりましたが４つは続いていますから、みんな７０年近く頑張っているという事です。

丁度今年が日本の戦争･戦後７０年で安倍談話は何を言うかが注目されていましたが、戦後５０年、６０年に首相談話を発表しましたが、談話を発表するということは、いま自分たちが節目を迎えたけれども、過去を反省し将来についてこうしていきたいということを考えて談話を出します。

また、天皇陛下とか皇后陛下とか、あるいは皇太子殿下や妃殿下、みんなお誕生日の時にメッセージ出しますね。節目の時に何を考えているか、ということをきちんと整理してメッセージを出しています。

今年は戦後７０年。７０年の時に日本で４４年ぶりに第２３回の世界スカウトジャンボリーが行われました。

このジャンボリーのテーマは「和」。

この「和」ということについてどの程度、日本連盟全体として取り組んだでしょうか。聖徳太子がおっしゃった「和をもって尊しとなす」という意味での日本の持っている「和」という安らぎである

とか、仲良くするという、そういう意味合いがあります。

＜Ｂ－Ｐの国際大会への想い＞

ベーデン・パウエルの本当のジャンボリーの想いはなんであったのか、何を考えていたのか。１９２０年イギリス・ロンドン・オリンピアで開かれた第１回世界ジャンボリーで、次のように述べています。

> もし、その気持ちがあるなら、われわれはスカウトの兄弟愛という全世界的な精神を通して、われわれ自身や、われわれの少年たちの間に友愛を発展させることを心に堅く決意し、ここから前進を続けていこう。
> そうすれば、われわれは、世界の平和と幸福、そして人類の間の親善を発展させる手助けをすることになるであろう。

ベーデン・パウエルは世界スカウトジャンボリーを始められ、５回参加しています。

【第１回世界ジャンボリー】1920 年。イギリス：ロンドン・オリンピア。
３３か国、８，０００人　日本から下田豊松、小柴博、リチャード鈴木が参加
ベーデン・パウエルが「世界の総長」に大歓声の中で就任

【第２回世界ジャンボリー】1924 年。デンマーク：コペンハーゲン、エルメルンデン
さまざまなコンテストの賞は、コペンハーゲンのスタジアムでＢ－Ｐから授与された。
このジャンボリーは単なるゲームでなく、世界市民教育に対する重要な貢献であることを示した。３４か国、約５，０００人。

【第３回世界ジャンボリー】1929 年。イギリス：バークンヘッド、アローパーク
６７か国５万人参加。（観衆３２万人）。
スカウティング創設２１周年記念「成年」ジャンボリー
金の矢と斧が埋められ、金箔で覆われた木製の矢は各国派遣団に贈られ、Ｂ－Ｐは「今、わたしは、平和、親善そして親交のサインの「金の矢」を託し、君たちを母国の仲間の許へ送り出す。
今後、平和と親善の象徴は、“金の矢”である。この矢をいつまでも持ち続けて、すべての人々が人類の兄弟愛のことを考えるようにしなさい」と述べた。

【第４回世界ジャンボリー】1933 年。ハンガリー：ゲデロ。
３４か国。２５，７９２人のスカウトたちがキャンプ。
ジャンボリー参加章は、ハンガリーの白い雄鹿
Ｂ－Ｐ「君たちは、この白い雄鹿を、前へ、上へと雄飛させ、前方へ上方へと君たちを常に導き、困難を乗り越え、新しい冒険に立ち向かわせるスカウティングの純粋な精神の象徴として見るようにしなさい。」

【第５回世界ジャンボリー】1937 年。オランダ：ヴォーゲレンザンク
５４カ国２８，７５０人参加
８０歳のＢ－Ｐは、このジャンボリーの印であるヤコブ杖を授与する際、「今こそ、わたしが別れを告げる時である。君たちには幸せな人生を送ってもらいたい。われわれの多くのものは。２度とこの世界で再び出会うことはないであろう」と述べた。

今年は戦後７０年、節目の年です。実は７０年間、日本は幸いにして戦争をしていません。しかし戦前の７０年は日清戦争、日露戦争、日中戦争など４回も戦争をしているのです。

これはその時代の日本と世界の背景や経済状況などに大きな影響があると思います。また、仕掛けた戦争か、受けた戦争かもこれから先の歴史学者の判断することであろうと思いますが今は、なにし

ろ７０年間戦争は無かったということを肝に銘じながら、その７０年前は４回も戦争があったのだということを是非心に留めておいてほしいと思います。
　今の若い方には、これからの世の中が昔のように４回も戦争を起こすような時代にならないように自分たちに何ができるか、ということも考えてほしいと思います。

　第２３回世界スカウトジャンボリーのテーマ「和」が、どの程度参加したスカウトやリーダーがよく理解してくれたかどうか、ということを私は言い続けてきました。
　ジャンボリーは楽しい、有益な交流ができますが、世界ジャンボリーが始まった理由・原点を知ってほしいと思います。
　１９０７年にボーイスカウト活動が実験キャンプから始まった数年後の１９１４年、サラエボで起こった戦争（第一次世界大戦）が世界中を巻き込みました。イギリスでも民間人を入れて１，３００万人、戦争をしている兵士でも１，０００万人が亡くなっています。結局一番多く亡くなったのは自分がお世話した子供達、言い換えれば、１，０００万人の戦死者のうち２０歳から２６歳までの人たちが７割だったということです。
　次の時代を背負っていく方がみんな死んでいったということで、B―Pにとっては一番大きな悲しみでした。
　ブラウンシー島でスカウト運動を始めた子供達２０人の内、実はこの戦争で５人も亡くなっているのです。自分が手掛けた子供達が、次代のイギリスを背負ってほしいと願った子供達が戦争で亡くなっています、ましてイギリス連邦は死んだ所に墓をつくるという風習がありますから、他の国で死んだ人はみんなイギリスに帰って来ません。例えば横浜の墓地にも戦争で亡くなったイギリスの方たちのお墓があります。

　Ｂ－Ｐは１９０７年のブラウンシー島の実験キャンプ１０周年の１９１７年に記念ラリーをしたいと考えていたがこの年はまだ第一次世界大戦終わっていませんでした。初めて世界ジャンボリーが開催できたのが、１９２０年。この時まだ日本はボーイスカウト日本連盟はまだ出来ていませんでしたが、北海道の下田豊松さんと東京の小柴博さんが船の中で出会った横浜にありました外国スカウト隊で活動していたリチャード鈴木の３人の方が第１回世界ジャンボリーに参加しました。

　このジャンボリーが終わる時に、ベーデン・パウエルが言った言葉はジャンボリーの本質を表していると思います。

第１回世界ジャンボリー閉会式の言葉。1920 年イギリス・オリンピア。

　スカウトの兄弟諸君。私は皆さんに大事な選択をお願いしたい。
　世界の人々には言葉や体格の違いがあるように、思想や感情にも違いがあります。
　もし、ある国民が自分たちの考えを他国の人々に押し付けようとすれば、悲惨な結果が待っていることをこの戦争が教えてくれました。
　そして、ジャンボリーは私たちに教えてくれたのです。
　我々がお互いに我慢し、譲り合うことが出来れば、そこには共感と調和が生まれるのです。
　皆さんの同意がここに得られるなら、断固たる決意を持って私たちは今日ここから出発しようではありませんか。
　世界に広がるスカウトの兄弟愛を通じて、自分自身の中にも友人たちの間にも同胞意識を育て、世界に平和と幸福をもたらし、世界中の人々に友好の輪を広げるのです。スカウト兄弟諸君、さぁ答えてください。
　諸君は私と心を一つにして、出発してくれますか。

　世界大戦の後、敵国になった人たち、中立を保った国の人、一緒に戦った国の人たちをも問わずに招いて世界的な大会をすることがこれからのスカウト運動には大事だ、ということで世界ジャンボリーが開かれたのです。

＜第１回から第５回世界ジャンボリー　〔兄弟愛と平和〕＞

Ｂ－Ｐが１回から５回までいろいろな言葉を言っていますけども、共通している言葉があります。それは「兄弟愛」と「平和」のキーワードです。

日本での世界ジャンボリーのテーマ「和」は、平和の“和”という意味と同時に、ただ戦争に対する平和だけではないということも含めてどの程度知っていただいたか。私は昨年から今年にかけて折々出かけて行って、世界ジャンボリーに行くリーダーやスカウトに、このことを忘れては世界ジャンボリーに行く価値が無い、ということを申し上げています。

第３回の時には、〔斧〕を示して、これは争いや戦争。悪いものであるということをみんなに見せるんですね。これと決別をしなきゃならない。スカウトたちを車輪の放射状のように集めてその真ん中に穴を掘ってこの〔斧〕を埋めるわけです。

同時にアローパークで行われたことを大事にして、このアロー〔矢〕をボーイスカウトの平和のシンボルにしようとして、Ｂ－Ｐは輝いている黄金の矢を作り、参加する国々に全部配ってこれをもって帰りないさいと言い〔斧〕を埋めてセレモニーを終わっています。

彼の中には、自分が育てた少年たちが戦争によって、これからの将来ある子供達がみんな散ってしまった。しかも自分の国を育てる者たちがみんな死んでいってしまった贖罪を含めて、それではいけないという思いが強くあったのです。

そのようなことがあって１９２４年、第３回の世界会議では、“ボーイスカウト運動は国家的である”で始まり国とか皮膚の色と言葉とかを超えたユニバーサル（普遍的）なものとして、発展していくということが大事で、

「スカウト運動は国家的であり、世界的であり、普遍的である。」

という「コペンハーゲン宣言」が出され、この精神が今も流れています。

是非覚えていただきたいのは、ベーデン・パウエルが願った世界ジャンボリーへの思い、それは「兄弟愛と平和」だったということを。

今世紀が始まります１９９９年、チリで開かれた第１９回世界ジャンボリーのテーマは「共に平和を築こう」でした。

２０世紀には第一次大戦と第二次大戦大きな戦争を２回しました。世界ジャンボリーはこの過ちを繰り返さないで新しい世界にしようというものになっている、ということで知っていただきたいと思います。

〔スカウト運動の成り立ち〕

～創始者が生まれ、育った時代は～

＜大英帝国時代に＞

１回目の世界ジャンボリーはボーイスカウトが始まって１０年目に開催をしようとＢ－Ｐは考えておられたが１９１４年第一次世界大戦が始まりました。

ボーイスカウトが正式に始まったのは１９０７年、その１年後に『スカウティング・フォア・ボーイズ』を刊行されました。

ボーイスカウトが始まった大英帝国はたくさんの植民地を持っており、インド、オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカなど各地が直轄領でした。

現在でも大英帝国連邦としてエリザベス女王が元首で、英国の宗教はキリスト教「英国国教会」で、英国国教会の流れの強い考えの国々で、ボーイスカウトが一般の国より早く伝わりました。

キリスト教を大きく分けると、ローマンカトリックという旧教とマルティン・ルターらが宗教改革を提案して新しく起こした新教がプロテスタントで、そのプロテスタントと旧教の間くらいのところが英国国教会。日本では立教大学がその流れを汲んでいます。

イギリスでもボーイスカウトが始まる母体の教会に日曜学校があり、子供たちに聖書の話をして教会のことを知ってもらう活動をしていましたが、大部分の子供達は労働者の子で聖書のお話を聞くだ

けではつまらないというので、「ボーイズブリゲート」という兵隊ごっごなどと言われる活動に興じていた時代にＹＭＣＡなどでボーイスカウトが始まったのです。

日本には、その年に国の役人や軍人、教育学者によって、ベーデン・パウエルがこういう本を書いたということがわりと早く伝わって来て、北海道、東京、静岡、京都などでボーイスカウトが伝わり活動が始まった。

ボーイスカウトという言葉を使ったのは三島通陽さんで、戦前に「ボーイスカウト」という名前を使っています。多くは、「少年団」「義勇団」「健児隊」などの名前を使って活動していました。

イギリスのビクトリア女王の時代には７つの海を支配し、たくさんの植民地があり、日の落ちない国と言われていました。

このような時代に産業革命が起きて電気が発明されたり蒸気機関車が出てきて、働く人たちの環境が変わってきました。工場に行って働く人が増え、ちょうどベーデン・パウエルが生まれた１８５０年の人口調査では、初めてこの時に農村にいる人の人数より都会にいる人の人数が多くなった。

イギリスの人たちの中の半数以上が従来農業とか手工業でやっていたところから離れて都会に人口が集中してきたが、日の出の勢いのイギリスも新しく起きてきた新興のドイツとアメリカにどんどん追い越されていくことになり、若い人たちの就職口が無くなり街中には働けない人たちが増えてきた。

そして、ベーデン・パウエルが４０歳頃で軍隊にいた頃の１８９８年、ボーイスカウトが始まる７年前のロンドンの各地で１２歳から１６歳くらいの若者がフーリガンとなり暴動を起こしている。彼らは義務教育が終わってすぐ働かなければならないが働くところが無いので、繁華街などでたむろして生活する状況になり、当然非行が多かった。

そういう時代の中でベーデン・パウエルは軍隊に入っており、いろんな経験をしたことがボーイスカウトの具体的な手法としては利用されていったと考えていいと思います。一方、ボーイスカウトの仕組みはベーデン・パウエルがアフリカとインドで大変長く生活された体験が確かにいろんなもので残っていることも事実です。

＜父親のＤＮＡと母親の感化＞

ベーデン・パウエルがボーイスカウトを始めた精神的なものは、ベーデン・パウエルが３歳の時に亡くなったお父さんのＤＮＡが大きいと思われます。

オックスフォード大学の先生でありながら、大学付きの教会の司祭であるというお父さんの血を引いたと思われます。一方心に大きな影響を与えたのは博愛主義のお母さんで、“人の差別をしない”“人に親切にする”　“人には恵みをする”という様な事をずっと言い続けていたお母さんに育てられました。

８歳の時に、彼は毎年誕生日になるとおじいさん（お母さんのお父さん）に手紙を出しているのです。８歳の時に書いた手紙です。

大人になった時の僕のおきて

僕は貧乏な人も僕たちと同じように幸福になるようにしてあげます。貧乏な人も僕たちと同じように幸せになる権利があるのです。

交差点を通る時は、必ず交差点にいる掃除夫にお金をあげます。豊かな人や貧乏な人がいるのも、すべて神様の御意思です。

僕たちは富を与えられたことを神に感謝しなければならず、よい人間になる方法を僕は知っています。

神様へのお祈りも忘れてはいけませんが、大切なことはお祈りをするだけでは良い人にはなれないということです。

よい人間になるためには一生懸命努力をしなければならないのです。

ボーイスカウトの理念は、彼の生育した背景の中で、特にお母さんの影響とキリスト教信仰に基づいて「ザ・ラストメッセージ」にあるような人生観を得られたことを是非知っておいてほしいのです。

８歳の手紙にある、この掃除夫とは、当時は馬車が交通手段であり、特に上流家庭の人は馬車に乗ってロンドンの街を動いていたのです。貧乏な人や子供達は、そのフンを拾い砂をまくような仕事をしているのを彼は見ており、同じ人間なのに何故こういう人たちがいるんだろうか、こういう人たちを幸せにするようにしなければならないという様なことを、この年代から考えていたのです。

私はボーイスカウトの理念、「他の人を助ける」ということは、彼が生育する中で体験したことだと思います。

イギリスが７つの海を支配して植民地をたくさん持ってきたのが、だんだんアメリカ・ドイツの新興によって落ちてくるそういう状況の中で、次代を担う子供達がこのままでいいのだろうかということでお書きになったのが、まず初めに「Reconnaissance and Scouting（偵察と斥候術）書」、その後に「スカウティングフォアボーイズ」を著作しました。順番があるのです。

１９０７年に初めてブラウンシー島で２０名のスカウトを集めました。この時に半分は自分に関係のある中流家庭の子供達、半分は労働者階級の子供達を混成して行ったのです。

〔子供を取り巻く環境〕

～青少年にいつも視点を～

＜子供の貧困（貧困の連鎖）／学校外活動費＞

日本連盟教育規程１－５に「本連盟の組織は、平等の原則に従い、すべての人に開放される」と書かれており、「すべての人に開かれている」とは、金持ちだけとか、物質的に恵まれている家の子供だけをボーイスカウトに入れるということではないということです。

高齢化社会といわれ、いかに老人がこれからの時代で大変になってくるのかということで、「下流老人」という言葉が脚光を浴びて、「下流老人　一億総老後崩壊の衝撃　朝日新書」という本が出されましたのをご存知ですか。

子供たちも同様な状況にあり、ＮＨＫを中心として、「子どもの貧困の問題」が取り上げられてきています。

親から子へ「貧困の連鎖」を防ぐための「子どもの貧困対策の推進に関する法律」が、平成２６年１月１７日に施行されています。

厚生労働省の調査では２０１２年の全国の「子どもの貧困率」は過去最悪の１６．３％でほぼ６人に１人の割合になっています。

生活保護を受けられる人やそれに準ずるぐらい日々の生活の中で家計が苦しいと言われる方々が多く、国民全体の３５％、３人集まって１人が非正規雇用労働者というような状況の中で、非正規雇用の方々は大体年収３００万円以下の生活をしているという現実を考えなければなりません。

このような家庭の子供は満足な教育を受けることができない状況にあります。確かに小中学校の教育費は義務教育で無償ですが、給食費、修学旅行費、学用品費、クラブ活動費などは自ら払わなければならないのです。

最近のデータを見ると給食１回の食事で１日の食事にしている子供、お金がないために修学旅行に行けない子供、学用品が買えないので他の人から借りているという子供もいるのです。

今の日本の子供達の中には就学援助費というものをもらっている子供が６人に１人いるという子供の貧困という現況を考えておかなければならないのです。皆さんそういうことをご存知ですね。

≪その他の学校外活動費≫の調査結果表をご覧になるとお分かりのように、学校以外の活動費のうち、教室、学習塾、進学塾などを除いた部分がその他の学校外活動費の状況です。

ボーイスカウトに参加している「体験・地域活動費」は他の経費支出の中で一番少ない。また、財政的な理由でボーイスカウトの活動に参加できない、参加していても辞めていくという人がいるということを知っておかなければなりません。６人集まれば１人は就学援助を受けている現実〔約１５２万人〕があるのです。

かって知り合いの教育社会学の先生方が、日本が経済的に危なくなった時に一番早く影響を受ける

のはボーイスカウトだと言っていましたが、その意味が分からなかったのです。
　ボーイスカウトはお金がかかりすぎるから入ってこないと言われています。一億総中流の時代は良かったがそれが崩れてきて総下流の方に来てしまった状況の中では、子供の教育費に多く掛けるというのはなかなか難しくなるというようなことが出てきています。
　私たちの活動を広く考えた時に、子供達の貧困が大きな問題になっている事を認識して、スカウト活動に参加している子供達に対して、または保護者に対して、どのようなアプローチやサービスをして、どのように還元をするのかということを真剣に考えていかなければなりません。
　そして、このようなデータを知り、ボーイスカウトは社会的にどういうところにいるのかということを知っておくべきでしょう。

≪その他の学校外活動費≫

平成 24 年度子どもの学習費調査（2014.1.10）

区分	その他の学校外活動費（単位　円）							
	体験・地域活動		芸術文化活動		スポーツ・レクレーション		教養・その他	
	公立	私立	公立	私立	公立	私立	公立	私立
幼稚園	1,491	2,868	18,583	24,950	20,689	35.112	12.184	19.299
小学校	5,023	22,640	35,167	96,691	53,109	75,085	27.858	63.751
中学校	2,384	13,664	18.273	41,411	23,147	22,362	14.479	25,075
高等学校	2,051	6,190	12,319	17,044	7,814	14,367	10,946	24,439
計	10,949	45,362	84,342	180,096	104,759	146,926	65,467	132,564

○　体験・地域活動費：ハイキングやキャンプなどの野外活動、ボランティア活動、ボーイスカウト、ガールスカウトなどの活動に支出した経費。
○　芸術文化活動費：ピアノ、舞踏、絵画などを習うために支出した経費。（音楽・映画鑑賞などの芸術鑑賞、楽器・演劇活動を含む）
○　スポーツ・レクレーション活動：水泳、野球、サッカー、テニス、武道、体操など、またはスポーツ観戦、イベント参加費などに支出した経費。
○　教養・その他：習字、ソロバン、外国語学習、図書購入、博物館などへの入場料などに支出した経費。
※　「体験・地域活動」の経費が一番低額である。
　　私立学校に通う子供の活動費が公立校に比べて高額になっている。

＜「道徳」の教科化＞

　子供たちの日々の生活はほとんど学校生活と家庭生活にあって、ボーイスカウトに来るのは、年間僅かな日にちしかタッチしていない。例えば長期キャンプで一週間行くということを除けば、月に何日かしかスカウト活動でタッチしていなく、ほとんどが学校や家庭の中にいるのです。
　このような状況の中で、我々の活動と大いに関係するのが、小中学校において再来年から「道徳」が特別な教科になります。
　教科になるということは、きちんとプログラムを作って、評価をして、点数をつけるということになります。今までは道徳教育が大事だからということで、小学校の１，２年生は生活科の中、３年生以上中学生になったら国語とか社会、あるいは総合的な学習な時間の中で道徳の時間として道徳教育が行われていました。
　私は、戦前の学校では「道徳」と言わず、「修身」、身を修める、ということで、どういうふうに人間として生きるかというような、人間として生きる規範を持つということを教えられていました。

　小学校３・４年生と中学校の道徳の時間の教科書の目次を表にしましたが、子供達が今学校でどんなことを学んでいるのかをきちんと押さえておき、我々の活動の中で「おきて」を活かしていく時に、非常に参考になると思います。
　学校でアプローチしていることを知りそれを補完していくために我々は「ちかい」と「おきて」をどう使っていくのか、「日日の善行」をどう結び付けていくのか、「いじめ」の問題にどう対応してい

くのか、彼ら子供達の生活の中に浸透させていかなければスカウト教育ではありません。
　スカウティングを実践している子供が日々の生活の中で、スカウトとして持っている“誇り”を活かさなければならないのです。
　あまりにもボーイスカウトはボーイスカウトで別だ、学校と別の世界でやっているのだ・・・では、Ｂ－Ｐの言われる本当の活きたスカウティングではないのです。

　私は、弱い者、恵まれない者に対しての温かい目を持つということが、スカウト運動の一番基本だと思います。そういうものを抜きにして富める者だけが、いい条件の者だけが楽しむというのが本当はスカウティングではないと思っていますが、このようなアプローチがボーイスカウトという世界の中に入ってしまうと忘れがちになっています。
　学校では再来年から小学校が、その次の年から中学校で道徳が教科として子供たち教えられますが、この道徳～どのように生きるか～ということを教えるベースが我々の「ちかい」「おきて」です。
　「道徳の時間」が始まる前には「心のノート」というのが子供達に渡されていました。
　小学生、中学生にお父さんやお母さんと一緒に読んでくださいと渡されたが、意外と読んでない方が多い。私は少なくともリーダーの方々には、子供達が学校でどんなことを学んでいるのか、数学では・・・国語では・・・社会科では・・・と子供達が何を勉強しているのかということを知り、そこからコミュニケーションを取っていかなければスカウティングは、なかなかうまく進められないのかなと思います。
　学校で道徳教育が始めるまであと１年半ありますが、これから日本の道徳教育がどういう方向に行くのか、ということについても関心を持っていただきたいと思います。

道徳教科書　目次（道徳の時間で使う）	
＜わたしたちの道徳＞　小学校３・４年生	＜私たちの道徳＞中学校
１　自分を高めて	１　自分を見つめ伸ばして
⑴よく考えて節度ある生活を	⑴調和のある生活を送る
■自分を見つめ、自分を生かそう	⑵目標を目指しやり抜く強い意志を
⑵やろうと決めたことは最後まで	⑶自分で考え実行し責任を持つ
⑶正しいことは勇気をもって	⑷真理・真実・理想を求め人生を切り拓く
⑷正直に明るい心で	⑸自分を見つめ個性を伸ばす
⑸自分の良い所をのばして	◎自分を深く見つめて
２　人間と関わって	２　人と支え合って
⑴誰に対しても真心をもって	⑴礼儀の意義を理解し適切な言動を
⑵相手を思いやり親切に	⑵温かい人間愛の精神と思いやりの心を
⑶友達とたがいに理解し合って	⑶励まし合い高め合える生涯の友を
■ささえ合い助け合い「合い」の力で心と心をつなげよう	⑷異性を理解し尊重して
	⑸認め合い学ぶ心を
⑷そんけいと感謝の気持ちをもって	⑹人々の善意や支えに応えたい
３　命を感じて	◎支え合い共に生きる
⑴命あるものを大切に	３　生命輝かせて
■たった一つの命　つながる命	◎生命を考える
⑵自然や動植物を大切に	⑴かけがえのない自他の生命を尊重して
⑶美しいものを感じて	⑵美しいものへの感謝と畏敬の念を
	⑶人間の強さや気高さを信じ生きる
４　みんなと関わって	４　社会に生きる一員として
⑴社会のきまりを守って	⑴法やきまりを守り社会で共に生きる
■みんなが守らなくてはならないきまりがある	◎一人一人が守るべきものがある
⑵働くことの大切さを知って	⑵つながりをもち住みよい社会に
⑶家族みんなで協力し合って	⑶正義を重んじ公正・公平な社会を
⑷協力し合って楽しい学校、学級を	

⑸きょう土を愛する心をもって コンピューターやけい帯電話などをどのように使えばよいのでしょうか	⑷役割と責任を自覚し集団生活の向上を ⑸勤労や奉仕を通して社会に貢献する ◎社会に目を向け、社会と関わり、社会を良くする ⑹家族の一員としての自覚を ⑺学校や仲間に誇りをもつ ⑻ふるさとの発展のために ⑼国を愛し、伝統の継承と文化の創造を ◎日本人としての自覚をもって真の国際人として世界に貢献したい ⑽日本人の自覚をもち世界に貢献する ◎情報社会の光と影 ◎あなたの身近にいじめはありますか

心のノート・私たちの道徳

文部科学省が２００２年（平成１４年）４月、全国の小・中学校に無償配布した道徳の時間の副教材。
２００９年（平成２１年）に新学習指導要領に対応して改訂されている。
心のノートは全面改訂され、「私たちの道徳」に名称変更され、翌２０１４年度から配布されている。

＜高校生あれこれ＞

ご案内のように改正公職選挙法が変わり来年から１８歳から選挙権が受けられることになり、高校生にも政治教育をしようということが論議されています。

ベンチャーの時代に「政治」について関心をもたなければならないことが起きてくるわけです。高校の授業にも「公共」という科目が出てくるでしょう。また日本史や地理は選択のため、日本の近代史を知らない高校生が多く、歴史の授業は古い時代から始まるから授業の時間が足りなくなると近代史は割愛されてしまう傾向にありますが、これから生きる知恵、アイデアで生きるためには近代史を自分自身で勉強するということがより必要になってくるだろうと思います。

《ＮＨＫニュースＷＥＢ》　2015 年 8 月 28 日　16 時 47 分

日本、アメリカ、それに中国と韓国の高校生のうち、「自分はダメな人間だと思うことがある」と答えた割合が、日本は７割を超えて最も高いなど、自己肯定感が低い傾向があることが、国立青少年教育振興機構の調査で分かりました。

この調査は、国立青少年教育振興機構がアメリカと中国、韓国の研究機関などと協力して高校生を対象に行ったもので、合わせて７，７７６Ｉ人から回答を得ました。

この中で、「自分はダメな人間だと思うことがある」かどうか尋ねたところ、「とてもそう思う」「まあそう思う」と答えた高校生の割合が、日本は７２．５％、中国は５６．４％、アメリカは４５．１％、韓国は３５．２％と、日本が最も高くなりました。

日本の高校生は自分がダメだという割合が高く、他の国、特に韓国と比べると倍ぐらい自分がダメだと思っています。このダメだと思っているということはどういう事なのか、何故このような高校生が出てしまったのか、ということを我々は真剣に考えていく必要があります。

実は、大人も同様に自信がないという傾向が他の調査でも示されています。このことは世の中の仕組みという問題だけではなくて、どう生きるか。金持ちになったり、あるいは英語ができたり、いいランクの職に就くとか、ということを本当に自分の幸せだ、一番いいことなのだ、と思えば当然そこに行かない自分はダメだということにしてしまうのです。価値観との兼ね合いが出てくると思うのです。

では、ボーイスカウトの場合の価値観をどこに置くのか、自分はどういう位置にいるのかというこ

とをきちんと知ることも大事ではないかなと思います。

今年の８月に発表された、国立青少年教育振興機構が行った「高校生の生活と意識に関する調査～日本・米国・中国・韓国の比較～」から見てみましょう。

体験活動では、日本人が一番多い順に並んでいますが、日本が一番多かったのは、「家事を手伝った事」で、順に「家族や親族のお墓参りをした」「体の不自由な人・お年寄りなどを手助けをした」と並んでいますが、「家事を手伝った」ことの割合は、アメリカ、中国、韓国と比較して日本が一番低い、注目をするのは、「弱い者いじめや喧嘩を辞めさせたり注意した」は日本人が一番低いのです。

高校生の日常生活の中は、このような現状だということです。おそらく今のベンチャースカウト諸君たちも、同じ状況にあるのではないでしょうか。

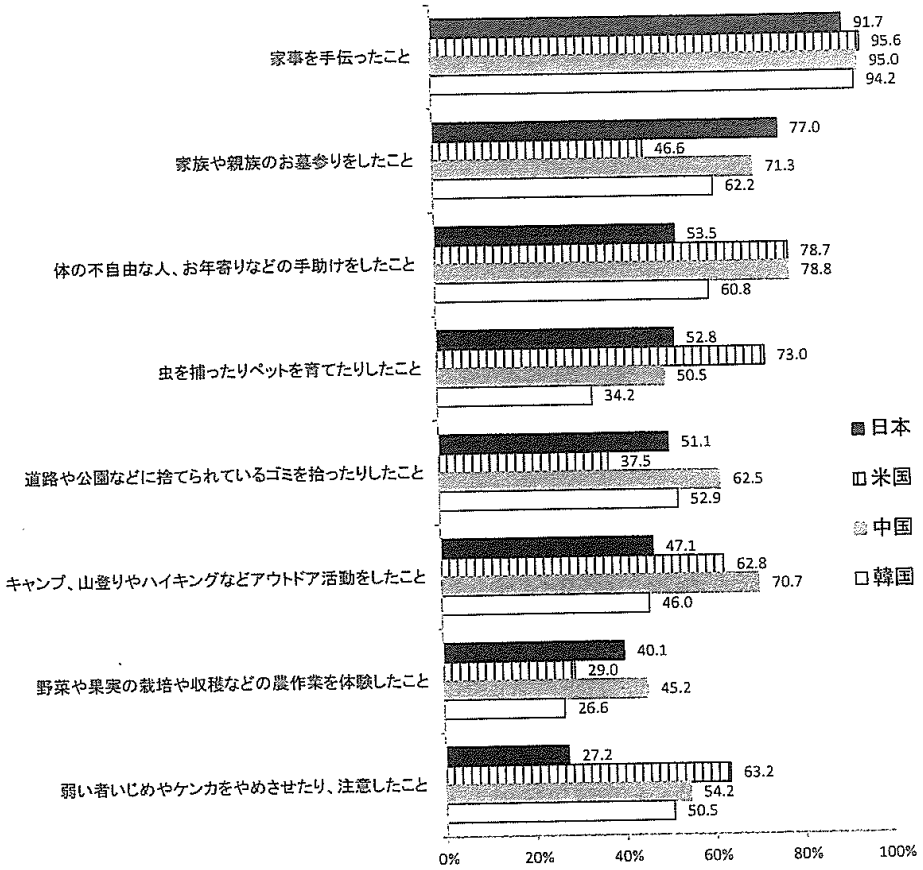


図1　体験活動（「何度もある」「少しある」と回答した者の割合）

人生目標についての調査結果を見ると日本の高校生たちがどういう立ち位置にいるのかが分かり、「お金持ちになること」「高い社会的地位につく」が顕著に他の国と比べて低い傾向が見られます。先程の、自分がダメな人間と思うことがあるというのが日本人が一番高いという数字が出ています。

これらのデータは高校生の傾向を知るための資料ですが、私が言いたいのは、今自分たちが対象にしている高校生がどういう傾向の状況にいるのか、これから彼らがグローバルな社会に打ち勝っていく時に他国の若い世代たちとどう生きていくべきなのか、どのようにしていくべきか、を考える上で我々の活動の中にどう活かしていくことを考える資料になるのではないでしょうか。

このように、データからベンチャーを取り巻く高校生年代の実態を知ることが出来るように、是非外の事を知っておくということは、非常に大事だと思っております。

私は総コミッショナーをさせていただいた時に、なんとかボーイスカウトのことを知っていただこうと思うのと同時に、他の団体はどのようなのかと思い、なるべく外に出ることにしました。

出てみると、井の中の蛙でボーイスカウト以外のことを知らない、自分たちだけで満足をしている。自分たちだけいいことをしているというような、ある面でうぬぼれ的な部分があって、出てみますと素晴らしいリーダー、素晴らしいシステムが他の青少年団体のところにもたくさんあるのです。

外の仲間から学んでいないということを感じました。世の中の動きにいつも関心を留めておいて、その上でこれからどうするかということを考えていただきたいと思います。

５　人生目標

人生の目標では、４か国とも「自分が幸せと感じること」と「円満な家庭を築くこと」と回答した者の割合が高い。日本の高校生は「お金持ちになること」「高い社会的地位につくこと」と回答した割合が、４か国の中で最も低い。

人生目標について、「自分が幸せと感じること」「円満な家庭を築くこと」が、４か国とも多く挙げられている。日本は「自分が幸せと感じること」「円満な家庭を築くこと」「のんびりと気楽に暮らすこと」「周囲から認められること」「お金持ちになること」「高い社会的地位につくこと」といった項目に対して、「とてもそう思う」と回答した者の割合が４か国中最も低い。

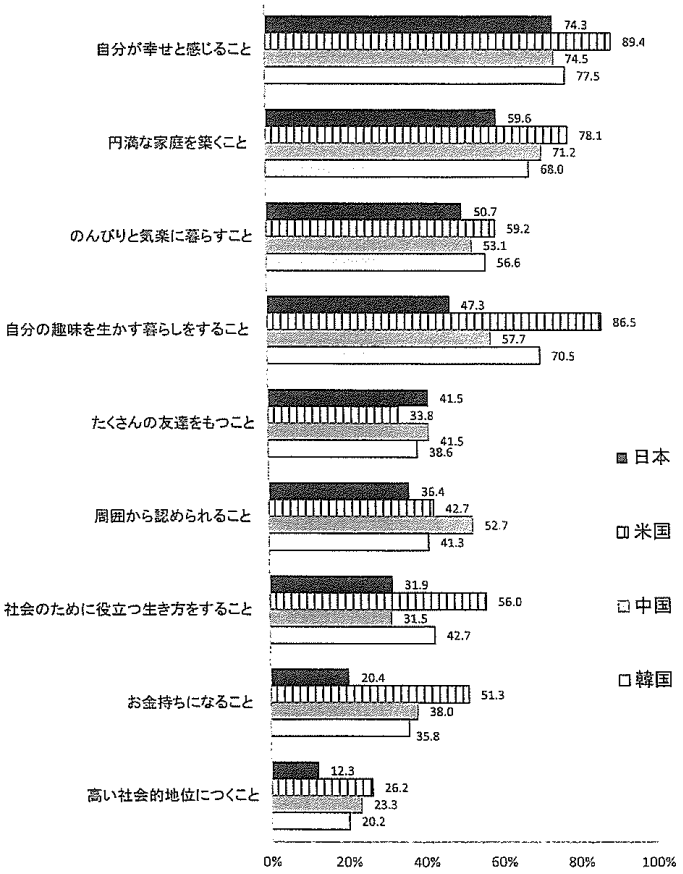


図 13　人生目標(「とてもそう思う」と回答した者の割合)

〔２１世紀教育の提言〕

～ユネスコ：21 世紀教育国際委員会報告書から～

国際連合の下部機関であるユネスコがこれから２１世紀の教育どうしていったらいいのかを考えるために全世界から１４名のメンバーを集めて（日本からは文部科学省事務次官天城勲さん）出されたレポート≪学習：秘められた宝≫が１９９６年に出ました。

このレポートをベースにして、世界で最大の５つの国際的ノン・フォーマル教育組織である「世界ＹＭＣＡ同盟」「世界ＹＷＣＡ連盟」「世界スカウト機構」「ガールガイド・ガールスカウト世界連盟」および「国際赤十字赤新月社連盟」の事務総長等によって、将来の教育ビジョンとして「２１世紀の教育」が取りまとめられました。

青少年の教育～ノン･フォーマル教育：国の青少年政策への提言
＜21 世紀の夜明けにあたっての声明＞

自主的で、支えとなり、責任をとることができ、明確な態度をとることができる青少年教育を目指して

（抜粋）

２－２教育の定義

2.2.1

教育とは一人の人間として、社会の一員として、能力の継続的な発達を可能にする一生続く過程のことである。

2.2.2

このより幅広い定義において、生涯を通しての教育は４つの柱に基礎を置いている。

〈知ることを学ぶ〉〈為すことを学ぶ〉〈共に生きることを学ぶ〉〈人間として生きることを学ぶ〉

2.2.3

それ故に教育は個人的と社会的の両方の過程である。

2.2.4

フォーマル教育：

段階的で年令順に学年に配される教育システムで、初等教育から第３の教育制度まで一貫している。

インフォーマル教育：

個人が家族、友人、仲間集団、メディア、周囲にあるその他の影響を及ぼす人や物といった日常の経験から身につける心構えや価値観、技能、知識による一連の過程である。

ノン・フォーマル教育：

確立された正規の教育制度の範囲外に組織された教育活動であり、同一とみなしうる学習目標で同一しうる学習者に役立つように意図されているものである。

2.2.5

＊　知識と仕事上の技能は普通、フォーマル教育を通して習得される。

＊　個人的、社会的な多くの技能は共にインフォーマル教育を通して取得される。

＊　人間生活を営む上で必要な知識や技能の習得と調和した価値体系に基づいた心構えの発達はノン・フォーマル教育を通して可能となる。

テーマは「学習」で、学ぶ者から見て学習、提供する方から見れば「教育」という形になりますが大事なのは学習者という立場で考えなければならない。

共通テーマは「生涯学習」で、誰でも、いつでも、どこでも勉強するというのが生涯学習です。

その学習する内容は「４つ」と定義されました。

「知ることを学ぶ」

学ぶことを学ぶということで、学校は基本的には知識を学ぶことが中心です。

「為すことを学ぶ」

職業上の技能だけでなくて、人間として生活を営む上で必要な技能を身につけるためである。

「共に生きることを学ぶ」

これから非常に大事になることで、グローバル化する中で、相互理解や平和と正義の重要性を尊重する精神などを育てること、共に生きるという思想は無いといけない。

「人間として生きることを学ぶ」

先の三つ事に併せて教育は青少年の潜在的能力を伸ばし、相互理解や平和と正義の重要性を尊重する精神などを育てること、人として生きることを学ぶ。

これはまさにB―Pが最後に残したメッセージとして、　人間はどう生きるかということを諭していることと同じです。

学習の大事な柱の一つは、人間としていかに生きるかということを学ぶことで、学校では残念ながら〈知ること〉と〈為すこと〉には重点を置くが、〈共に生きることを学ぶ〉〈人間として生きることを学ぶ＞には重点を置けないので、学校以外の「学びの場」で大いに勉強する、学習する場を作らなければなりません。

その方法として、

≪フォーマルエデュケーション≫

定型的に決まった内容での学びで学校です。

≪インフォーマルエデュケーション≫

非定型な学びで、本を読む・新聞を読む、友達と話をする、研修会に参加するなど先輩の話を聞く、職場での学びを活かすという様な事がインフォーマルな学習です。

我々はともすると、学びの場というのは定型的な所、研修所などに行かなければ学べない、何とか訓練コースに行かないと学べないと思いがちですが、大事なのは日々の中でやる学習が大事なのです。いつでも、どこでも、誰もが出来るのが生涯学習です。

≪ノン・フォーマルエデュケーション≫

それらを補完するもので、学校のようにきちんと枠組みが決まっていて自由度の無いものではなく、一つの教育目的に従った確立した教育システムで子供達に学びを、そういう団体が大事だというのでノン・フォーマルという第３の分野が提示されました。

この提言に基づいて、世界でこのノン・フォーマル教育を行っている前記の世界スカウト機構などがこれからノン・フォーマルエデュケーションを進めていくかということをちょうど２１世紀を迎える時に「学習：秘めたる宝」という題名の報告書を発表しました。

ノン・フォーマルエデュケーションの代表格であるボーイスカウト、ガールスカウトは、もう一度このことをきちんと押さえて、「何を学ぶのか」「どういう知識を学ぶのか」「どういう技能を学ぶのか」「どのようにして共に生きるのか」「どういう形で共に人間として生きることを学ぶのか」を考えることが大事なことではないでしょうか。

教育を考える時に、小学校・中学校・高校生や大学生だけが学校で学ぶのが教育ではなくて、もっと広く我々も、８０歳になっても学ぶ場があるということです。

かつて５０年前、私がスカウトに教えたような事を同じようにやっていたならば、それは生きたスカウティングをしていない証拠なのです。もし仮に私に今、スカウトを指導するように言われたら、それは２０年前５０年前やったものも参考にしますが、時代に合った違うやり方をします。そうでなければ、スカウトにも、保護者に対しても、ボーイスカウト運動にも失礼なことです。

従って、スカウト運動を通じて我々は何を学習しているのか、スカウトたちに何を学んでもらうのかということを、もっときちんとしていく必要があると思います。

〔「ちかい」と「おきて」〕

～決意と実行について考える～

「僕は今度入った仮入隊員だ、ちかい、おきての暗記も、まだできぬ　コカチェ　ランク　チェランクチェレイリ・・・そら頑張ろう」の歌は、新しく入ったスカウトたちを激励する意味で、中村　知先生が分かり易く説明した歌で、私は非常に気に入っている歌です。

「ちかい」は一回立てればいいのだ、という人がいますけども、私は違うと思います。

「ちかい」を立ても、人間は忘れるのです、初心忘れべからず、と言っても初心は忘れがちなものなのです。
「ちかい」は一回立てたからボーイスカウトからベンチャーに上進する時にもう一回再確認をするという。どうやって確認するのですか、ベンチャーからローバーになる時に、「再認」することはどういうことでしょうか。
一番大事なことは何回も確認することです。そのことが今の日本全体に欠けていると思います。
「ちかい」は一回するとお終い、そんなものではないのです。
「ちかい」は『スカウトのちかい』です、ただ単に「ちかい」があるのではないのです。「おきて」も『スカウトのちかい』です。そのこと＜スカウト＞が欠落しているのです。
ただ単純に「ちかい」、「おきて」を暗唱するだけで自分とは関係ないと思っていませんか。
「ちかい」は「スカウトのちかい」であり、「おきて」は『スカウトのおきて』だということをもう一回確認してほしいのです。

先程の歌の歌詞に、新入隊員が暗記をするという表現が出ていましたが、「ちかい」「おきて」はしっかりと覚えさせるものなのです。
一番大事なものをきちんとする、このことが出来ないと駄目です。きちんと暗記をする、覚えるということです。
覚えたらそれがどういう意味なのか、そのことが副文といわれるところに書いてあるのです。戦前の少年団が戦後ボーイスカウトに変わる時に、昔の少年団の「宣誓」と「掟」は難しかったので、戦後もう少し分かり易くしたほうがいいのではないかということで中野　忠八さんが、「おきて」の文章の後に添え書きを付けられました。
当時の「おきて」は１２あり、「１．スカウトは誠実である」には、「スカウトの真の資格は信用され得る人間にのみ与えられる、うそを云わずごまかしをせず、信頼されて託された任務を正確に行うことなどは総べてスカウトの名誉を保つ基礎である」とはっきり言っているのです。
「誠実である」ということだけは伝えているかも知れないが、その副文の事をどの程度皆さんが真剣に子供達と話題にしているのかどうか、このことをもう一回全体で振り返ってみなければいけないことだと思っています。
もしかすると、暗記はしていない、内容も分からない。それではスカウティングの基盤にあるものは無しに、キャンプに行ったり、ゲームをしたり、外側に見えるものだけを大事にしているのであれば、地下にあるべきものを見ていない、そこから栄養分を取っていない仮の姿なのですね。

私がスカウトの時に、隊長から「１２のおきて」と副文を書かされ、手で書くことによって字も覚え、意味も覚えることができました。書くことによって「１２のおきて」を否応なしに覚えることができて、書くことを指導してくれた隊長に感謝しています。
世の中に抵抗しているわけではありませんけれど、私は機器は活用していませんから、何でも手で書いており、書くことによって覚えます。
八つになった「おきて」も、もう一回確認することをした方がいいと思います。

カブ隊の「さだめ」は、「１　カブスカウトはすなおであります」と、まず素直なのです。「進んでいいことします」ではなく、まず素直なのです。「自分のことを自分でします」が２番目で、３番に「たがいに助け合います」で、４番に「おさないものをいたわります」。５番に「すすんでよいことをします」。
「ちかい」も「おきて」も同じで、順番の意味があるのです。ですから、「１　スカウトは誠実である、２　スカウトは忠節を尽くす、３　スカウトは人の力になる」と、ちゃんと番号を言うのです。
最近は番号を言わないでずらずらっと言う傾向がみられますが、きちんと番号を言い、一つ一つ独立して意味のある「ちかい」「おきて・さだめ」を言う教育も大事だろうと思っています。
そして大事な事が、「ちかい」と「おきて」の共通する言葉があり、それは「名誉」なのです。
“私（杉原正）は名誉にかけて、次の三条の実行を誓います”といいます。「一、神（仏）と国とに誠を尽くしおきてを守ります」「一、いつも他の人々をたすけます」「一、からだを強くし心をすこ

やかに徳を養います」と三つの事をきちんきちんと言います。
「おきて」で、１スカウトは・・・と言いますが、スカウトとは「私は」ということなのです。
世界スカウト機構の「ちかい」「おきて」は、ベーデン・パウエルによって当初考えられた原文（英文）にしたものですが、日本と違っている表現があります。
一番初めは、「スカウトの名誉は信頼される事である」、２番目からは「スカウトは何々である」と言っています。
「おきて」の一番に「スカウトの名誉は」とわざわざ言い「信頼される事である」と繋がり、「私の名誉は、私自身が信頼される人間になるのだ」ということから始まるということを、スカウトたちに伝えていかなければなりません。

そのことをできるようにするためにスカウト記章の下の巻物に、どんな苦しい事があったり、辛いことがあったりしても笑顔で「そなえよつねに（Be Prepared）」をするのだ。「ちかい」「おきて」をベースにして、「そなえよつねに」をするのだと言っています。
そして最終には「日日の善行」よりよき奉仕に繋がっていくことをスカウト記章は表しており、スカウティングの「体現」でもあります。

世界スカウト機構　基本原則

原 理

１　スカウト運動は、以下の原理に基づいている
「神へのつとめ」「他へのつとめ」「自分へのつとめ」
２　ちかいとおきての順守

〔スカウトのちかい　The　Scout　Promise〕

私は名誉にかけて、次のことに最善を尽くすことをちかいます
神と国王（あるいは、神と私の国）に対する私のつとめはたすこと
いつでも他の人々を助けること
スカウトのおきてを守ること

〔スカウトのおきて　The Scout Law〕

１　スカウトの名誉は、信頼されることである。
２　スカウトは忠節である。
３　スカウトのつとめは、他の人の役に立ち、他人を助けることである。
４　スカウトはすべての人々の友人であり、他のすべてのスカウト全員と兄弟である。
５　スカウトは礼儀正しい。
６　スカウトは動物の友である。
７　スカウトは、親や班長または隊長の命令を黙って従う。
８　スカウトは、いかなる苦境にあっても微笑み、口笛を吹く。
９　スカウトは、倹約する。
10　スカウトは、思考、言葉、行動において健全である。

＜初級章、２級章、１級章＞

今のスカウト活動は初級スカウト章の「スカウトマーク」と２級スカウト章の「微笑みの形と“そなえよつねに”」の上と下の二つが結びついていませんね。
スカウト記章は、１級章のように“スカウトマーク”と“そなえよつねに”が結びついて、初めて意味を持ちます。
このスカウト記章の意味を皆さんは分かっているのでしょうか。
「ちかい」「おきて」をベースにして、具体的な技能の習得や準備は辛いかもしれない、また我慢するかもしれない、けれども笑顔を持ってやっていくということが大事なのです。
あの、イチローだって試合のある時だけバッティング練習をしているのではない、人の見えないところで自分が指名されて出る時にいつでもできるように、それだけ努力をしているのです。

心の上でも技能的にも準備〔Be Prepared：そなえよつねに〕していることがスカウト記章に表現されているように、初級章の上の部分と２級章の下の部分が結びつけてあるのです。
そのことを、丁寧にスカウトに伝えているのでしょうか。そのことをご理解がないリーダーがおられるのではないでしょうか。

もう一度、初級章の意味と、二級章の意味と、一級章の意味を考えた方がいいと私は思っています。三段跳びで言うならば、ホップをきちんとやって、ステップをやって、ジャンプをするという展開がないと、三段跳びにはならないのです。

〔三位一体のスカウティング〕

これだけ頑張っているのに成果が見えてこないとぼやく声を聞きますが、それはこの３つのものが体現できていない。いわゆる三位一体。これはキリスト教の言葉ですけれども、３つのものが一つになって初めて成り立つということを、もう少し丁寧に考えていく必要があるのではないでしょうか。
皆様それぞれこのスカウト運動に入ってきた経緯は違うと思います。仕事が違い、それぞれの年齢も違い、あるいはスカウト経験が有る無しなど違っていいと思います。
けれども、これからどうやって若者たちにメッセージを伝えていくか。基本的な事を伝えていくかということについては共通に理解する責任があると思います。
やはり基本を大事にするということを、もう一回確認をしておかないと、多くの青少年団体の中でも「ちかい」「おきて」ということをベースにしているという我々の団体にとって大事なことが少し影が薄くなってしまっているのではないかと感じています。
我々自身もしっかりとスカウティングという尊厳を踏まえてやっていきたいと思っております。

スカウト精神とはどういうものなのかということを、それなりの言葉で言うということは、正直言ってなかなか難しいかと思います。私たちが何かに迷った時に、ボーイスカウトは何かということを考える時に、ベーデン・パウエルは色々なものを残しています。その象徴的なものはスカウトに残した「最後のメッセージ」ではないかと思います。
「どのように生きるか」ということを文章の中に残しています。
このことをもう一回考えると。「今あるもので満足し、それを最大なものにしなさい。お金持ちになったり、栄達に成功したりすることが本当の幸せではないのだ、振り返ってみれば自分の人生というのは、人に幸福を分け与えることによって、自分自身は幸福に生きた。とにかく時間を無駄にしないで生きたという喜びを感じるのだ」ということを残しています。
最後に、「おきて」を実行するように。そうすれば、神様が君たちを守ってくださるということを明言されています。

＜スカウターとして＞
『スカウター』、Ｂ－Ｐはリーダーに、リーダーへという言葉は残さず『スカウター』なのです。
スケートをする人をスケーター、スキーをする人をスキーヤーと言いますが、リーダーという表現ではスカウトをする人というふうには思えないので、『スカウター』を使っています。
リーダーはスカウターであってほしい、スカウトをする人であってほしいと思います。ガールガイドのリーダーをガイダーと言いますが「スカウトをする」「ガイドをする」人が非常に大事なことではないかと思っています。
自分自身を見ても、もしかするといつもリーダーであって子供達の前に立つ時にも、人の前に立つ時にも、自分が『スカウター』であるという自負をどの程度もっていたか反省しています。

高い目線でものをいう事ではなくて、少年の心を持って子供に接するスカウト活動を行う。
そういう人間だ、ということになっていくべきだと思います。

私たちは、「スカウティング」という言葉を往々にして使いますが、スカウティングという言葉は３つ意味合いに分かれているような気がします。
一つは、“スカウト教育”という場合にもスカウティングと使いますが、その時はスカウト教育は何か、ということをきちんと話されないと誤解が起きることがあるのではないかなと思います。
二つ目は、“スカウト活動”という場合、単に“スカウティング”と言ってしまうと、どうも主語がぼやけてしまいます。
最後は“スカウト運動”は何なのか、それをみんな“スカウティング”と言ってしまうことがあります。
我々は『スカウティング』という言葉を使うときにはよく吟味をして、スカウト教育について人に説明する時にはその内容をきちんとお話になって欲しいし、“スカウト活動”をという時にはその内容を言ってほしいと思います。

“スカウト教育は”という時には、非対象者に対してスカウト教育を、あるいは保護者に対して、社会に向かってスカウト教育はどういうものかということを明示にするためには、どういう言葉を使った方がいいのか。
“スカウト活動は”という時には、これはスカウトに対する目線の事ですから、きちんと分けてお話をしたほうがいいと思っています。
三つ目は“スカウト運動”スカウトムーブメントになっているかということは、社会に貢献をしているのか、社会に役立っているのかということです。

＜地域貢献、社会貢献をしているのか＞
日本のスカウト運動は、あくまでも私個人の意見ですが、スカウティングは地域や社会に役立っていないのではないかと思います。スカウト活動という中だけで考えないで、地域や社会に役立っているのだろうか、世の中から必要とされているのだろうか、ということをもう一度考えたらどうかと思います。
最後に好きな言葉を申し上げます。「難しいことを易しく、易しいことを深く、深いことを愉快に、愉快なことを真面目に」（劇作家、井上ひさし）、これはこれからスカウト活動に実際に関わるリーダーにとって心しておかなければならないと思います。
難しいいことを難しくは誰でも出来ますよ。難しいことを易しくどう教えるか。難しいということをサッと言ってしまってお終いにするのか。それは深くやらなければいけません。愉快な事を、ただ面白かった、良かったではなくて、そういうのをきちんと真面目に受け止められるように仕向けているかどうか。そんなことを感じております。
私は、「スカウト精神」をスカウトに繋ぐということは、もう一回「ちかい」「おきて」というところの原点に返って、私たちがそのことを十分咀嚼をして本当にやっているかということを考えておかなければならないと思います。
最後に「プログラム活動のループ」の資料を示します。プログラム活動はボーイスカウトの特徴で累進的な物であると書いてありますが、この考え方でプログラム活動をやらないと、ただ表（おもて）に見えてきたものだけを見たのではいけません。
この「プログラム活動のループ」を通して、学習のプロセスとして知識から、どう行動に導くようにするか、スカウトたちの身近なところから始め、発展させ、より広い範囲の課題に取り組み、対処できるように導きたいと思います。
これから皆さんがそれぞれ団にお帰りになって、子供達と色々な活動をしてほしいと思います。大変なことがいっぱいあると思いますけれども、我々は次代につなぐ責任があるということを共通な理解として、お互いにこれからも頑張りたいと思います。ご清聴どうもありがとうございました。

プログラム活動のループ

世界スカウト機構の基本原則に示される運動としての教育において自発的行為（Voluntary）が特徴として位置づけられている。

そしてスカウト教育法（Scout Method）は、以下を通して行われる段階的な自己啓発教育システムである。「ちかいとおきて」、「行うことによって学ぶ」、「小集団の一員となる（例：班）」、「主に自然とふれ合う野外環境の下で行われるゲーム、役に立つ技能、地域社会への奉仕を含む参加者の興味に基づいた様々な活動の段階的かつ刺激的なプログラム」と定義されている。

－－－－－－－－－－－－＊－－－－－－－－－－－－＊－－－－－－－－－－－－

出合い・体験する
（人、物、自然、出来事など）
↓
気付き
（新しい発見、感動）
↓
考える
（想う、分析する、推理する）
↓
行動する
（話し合う、伝える、広める）
↓
実感する
（身に付く、評価する）
↓
企画する
（思いつく、自信をもつ）

探求する
（課題を見つける）
↓
対応する
（経験に照らして）
↓
行動する

－－－－－－－－－－－－＊－－－－－－－－－－－－＊－－－－－－－－－－－－

プログラム活動

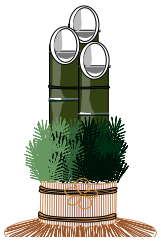
個人プログラム　　個人が成長するための学習プログラム

集会プログラム　　個人に刺激を与え成長させるプログラム

＜学習のプロセス＞としては

知識から行動を導くように、探求する　→　対応する　→行動する　→探求する、のように周期またはループとした学習の進め方が大事ではないか（螺旋状に発展していく）

子どもたちの身近なところから始め、発展させ、より広い範囲の課題に取り組み、対処できるようにしたい。



申年弥栄

２０１６ 新春　誌上賀詞交換

北 海 道 神 宮

名誉宮司　原口法義
宮　　司　吉田源彦

〒064-8505　札幌市中央区宮ケ丘４７４

スカウトの仲間を増やして
運動の拡がりを！！

北海道連盟　連盟長
北海道連盟　先　達

三浦　武

赤平市

賀　春

北海道議会
ボーイスカウト育成議員協議会顧問

釣部　勲

新十津川町

北海道連盟維持財団　常任理事
北海道連盟　相談役
北海道スカウトクラブ　副会長

入部　道之

あけまして
おめでとうございます

北海道連盟副連盟長
北海道スカウトクラブ幹事長
江別第２団ビーバー隊長

大橋　和子

謹賀新年

北海道連盟相談役
札幌第２６団　団委員長

前田 和道

謹賀新年

スカウトの目線で活動しよう！
日本ボーイスカウト北海道連盟　理事長

長 岡 正 彦

５ＨＴＣ（福島大会）を成功させよう！

2016

新 春 弥 栄

コミッショナー　清 水 義 明

新春弥栄！

北海道連盟副理事長　留萌地区委員長

三 国 久 介

謹賀新年！
スカウトに楽しいプログラムを！

日本ボーイスカウト北海道連盟

副理事長　**下田　好徳**

あけましておめでとうございます
胆 振 地 区
―地区役員―

地区協議会会長	滝口　信喜
地区協議会副会長	熊野　正宏
地区委員会委員長	田中　洋一
室蘭第１団団委員長	髙橋　忠義
室蘭第４団団委員長	田中　洋一
登別第1団団委員長	木原　靖之
伊達第1団団委員長	辻　　正博
苫小牧第２団団委員長	永井　承邦
コミッショナー	村中　啓子
副コミッショナー	月館　良治
事務長	小笠原　貢
事務次長	渡邊　昌彦
地区会計	佐藤　公英
総務委員会副委員長	亀岡　富信
ｽｶｳﾄ委員会副委員長	松橋　恵一
ﾘｰﾀﾞｰ委員会副委員長	猪股　瑞彦
ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ委員会副委員長	西岡　　浩
地区監事	鷲沢　義則
地区監事	津田　和明

―北海道連盟役員―

地区選出理事	田中　洋一
副理事長	下田　好徳
監事	髙橋　忠義
名誉会議議員	髙木　　康
相談役	高田　道夫
参与	塩谷　真守
参与	佐藤　公英
参与	西岡　　浩

事務局　室蘭市本輪西町３丁目22番12号

謹　賀　新　年
石 狩 地 区

顧　　問	原田　　裕
地区協議会長	箱島　　盈
地区委員長	小林　幸治
事務長	猪股　　巌
地区コミッショナー	飯田　康弘

新年！弥栄！！

留萌地区

留萌第１団	団委員長	櫛井　二三夫
留萌第２団	団委員長	下田　満
秩父別第１団	団委員長	寺迫　公裕
羽幌第２団	団委員長	小寺　克彦
稚内第２団	団委員長	前田　義彦
地区協議会長		櫛井　二三夫
地区委員長		三国　久介
地区コミッショナー		小笠原　祐治

謹賀新年

旭川地区協議会

顧　問	野原　典雄
顧　問	川村　武雄
顧　問	森　　豊
地区協議会長	松倉　信乗
地区委員長	高橋　明
地区副委員長	山口　淳
野営行事委員長	山口　淳
組織拡張委員長	高橋　明
リーダー委員長	町田　清
野営場運営委員長	天満　昇
財政委員長	仙座　猛
会　計	金澤　利寛
事 務 長	浅野　玲子
監　事	菅原　ヱミ子
地区コミッショナー	村上　政義
副コミッショナー	宮澤　多佳子
副コミッショナー	杉田　肇

謹賀新年

北網地区

地区協議会長	櫻田　正文
地区委員長	鴨下　泰久
地区コミッショナー	得能　和成
地区副コミッショナー	松谷　政史
地区副コミッショナー	加藤　由麻

賀　春

ボーイスカウト北網地区協議会

会　長　　櫻田　正文

2016

新春弥栄

ともに“光の路”を歩みましょう！

十勝地区

帯広第４団

育成会長　渡邊伸夫

団委員長　尾張　景

指導者・スカウト・保護者一同

「第５回 北海道・東北ブロック野営大会」
皆で参加しよう！！

謹賀新年

≪上川地区≫

地 区 協 議 会 長　　本間　勲
地　区　委　員　長　　佐々木　篤美
地区コミッショナー　　長谷川　良雄
地　区　事　務　長　　土橋　頼浩

北海道連盟監事
札幌地区副委員長
札幌第４団団委員長

北　秀継

謹賀新年！

今年もよろしくお願いいたします

ボーイスカウト北海道連盟
札幌第９団

育 成 会 長　　岩佐　眞
育成会副会長　　北野　義城
団 委 員 長　　樟本　賢首
副団委員長　　北野　和

本派弥栄

髙橋　忠義

北海道連盟監事
室蘭第１団（本教寺）団委員長

新春弥栄！

日本ボーイスカウト北海道連盟
常任理事　**北野　和**

活動的で自立したスカウトを
育てることを目指して

北海道連盟　副理事長
扇間　康弘

平成２８年度
北海道連盟の目標（案）

《気づきから
参画・行動へ》

斧の響き　１５２号（平成２８年１月１日発行）
発行・印刷：日本ボーイスカウト北海道連盟／発行責任者：北海道連盟 理事長 長岡 正彦
〒062-0934 札幌市豊平区平岸４条１４丁目３－４０ 北海道ボーイスカウト会館内
Tel 011- 823-7121／ Fax 011- 814-9377　E-Mail bs-douren@bz04.plala.or.jp
北海道連盟公式ＨＰ　http://www.bs-douren.org/